

## 猪野夫人のポケット・カメラの購入行動

5

昭和 51 年 11 月のある日、猪野平太氏夫人の垂理子さんは自宅の居間でアルバムを広げていた。今、彼女は先月の旅行の写真をながめながら、楽しい旅行の出来事を一つ一つ思い起していた。彼女が撮影してきた写真には、美しい紅葉の信濃路の風景と、楽しげな友人達の笑顔が浮かび上っていた。

その時、突然、玄関のブザーが鳴って、隣家の秋元夫人の呼ぶ声が聞えた。秋元夫人は彼女より 5 才位若く、最近、小学校の PTA の役員になったばかりで、何かと猪野夫人に相談に来ていた。今日の用件も、12 月に行なう PTA のバザーの件についてであった。猪野夫人は、長男が 5 年生の時から近くの小学校の PTA の副会長を 4 年間も続けていた。

10

用件を終えた時、秋元夫人は、居間のサイド・テーブルの上に置いてあるアルバムに気づいて、「あら、この間のご旅行のお写真を見ていらしたの。私にも見せて。」と語った。「ええ、どうぞ。」と言って、猪野夫人はアルバムを開いて見せた。「わぁきれい。きれいに撮れているわね。」「お天気でよかったわ。でも、初めてのカメラだったものだから、うまくとれなかったの。」「そんなことないわ。素晴らしい写真じゃないこと、特にこれなんか。奥様、カメラをお買いになったの。」「ええ。」「私も一台欲しいなと思っているところなの。」「主人のカメラでは、大きくて重いでしょ。それに難しすぎるものだから、私、ポケット・カメラを買っちゃったの。」と猪野夫人は話した。

15

20

それから、猪野夫人は、秋元夫人にそのカメラを見せながら、どういう考えで、どのようにして彼女がそれを買ったのかを説明した。2 人は時間の経つのも忘れて話し合っていた。

猪野家は、横浜市の郊外、田園都市線の沿線に住居を構えていた。今住んでいる家は、去年の夏に、親の遺産と預金などを頭金に、銀行や会社から 1 千万円程を借りて購入した建売住宅であった。その前は、すぐ近くの公団の団地に 7 年間住んでいた。結婚してから団地を 2 転 3 転し、精一杯生活を切りつめて獲得したマイホームに猪野夫妻は満足していた。東京の都心にある会社まで自宅からの通勤時間は約 1 時間、ここは緑に囲まれた閑静な住宅地であった。

25

猪野平太氏は一流会社のベテラン課長で、入社後はほとんど営業畑を歩いていた。学生時代

30

---

このケースは、慶應義塾大学ビジネス・スクールの滝沢 茂教授が、ポケット・カメラのユーザーに関する調査と業界調査にもとづいて、クラス討議のために作成したものである。一部の固有名詞は変装されている。  
〔昭和 51 年 11 月作成〕

からテニスやスキーに親しむスポーツマンであったが、最近の10年間はゴルフに夢中になり、腕もあがっているようであった。ゴルフをやり始めた頃は、亜理子夫人も、健康によいということで夫のゴルフに積極的に賛成していたが、最近のように、やれ「お客さんとの付き合いだ」とか「社内コンペだ」と言っては頻繁にゴルフに出かける夫に、亜理子夫人は少々不満であった。

猪野家には従来カメラが2台あった。その内の1台は、平太氏が結婚前に購入したハーフ・サイズ・カメラで、子供達が乳幼児の頃は、よくそのカメラを持って家族全員で近くの公園や遊園地に出かけたものであった。しかしながら、そのカメラは古い型のもので、故障も多くなったことから、猪野家では数年前に、新たにカメラを一台購入した。

「今日ボーナスが出るから、帰りにカメラを買ってくるぞ。」と言って課長になりたての夫が出勤して行った日のことを、亜理子夫人は今でもよく憶えていた。帰宅した夫が開けた包みの中からは、亜理子夫人がそれまでに見たこともない立派なカメラが出てきた。「ミノルタの一眼レフ・カメラだ。ちょっと高級すぎたかな。でもこれも課長の勲章のようなもんさ。」と猪野氏は語った。亜理子夫人にはその意味がすぐには呑込めなかったが、夫からカメラの値段を知らされて改めてびっくりした。カメラを買うことは、夫婦で相談し計画したことであったが、亜理子夫人には、ボーナスをあてこんで、他にも幾つか買物の計画があった。それらの買物の夢の大半が一瞬にして水泡に帰した。しかし、その時、亜理子夫人はその事を一切口に出さなかった。

しかしながら、その年の暮から正月にかけては、猪野家には楽しい出来事が連続した。猪野平太氏は子供達の先頭に立って、クリスマス・ツリーを作ったり、正月の飾りをし、バチバチ写真を撮りまくっていた。亜理子夫人の目からみると、夫はたんに数多くの写真を撮っているだけではなく、演出などをしたりして、明らかに芸術的な良い写真を撮ろうとしていることがうかがわれた。

それから1～2年の間、猪野平太氏は休日によく家族旅行を計画し、子供達の運動会や学芸会にもカメラを持って出かけていた。その頃、如何に猪野氏がカメラを使っていたかは、アルバムを見れば一目瞭然であった。時には、良い写真を四ツ切に引伸して額に入れ、室に飾ったりもした。長男の太郎が、「パパはプロのカメラマンみたいだね」とほめると、猪野氏は、何時もご機嫌な顔をして笑っていた。

しかしながら、その後しばらくすると、猪野平太氏は以前程写真を撮らなくなった。前述の如く、ゴルフに夢中になり、会社の内外の人達との付き合いも多くなり、休日を家で過したり、家族と行楽に出かけることが少なくなったのである。そのため、亜理子夫人は1人で子供達を連れて行楽に出かけることが多くなった。そのような折に、何度か、彼女は夫からカメラを借

りて行こうかと迷ったが、夫のもつ一眼レフ・カメラは大きくて重く、そして何よりも操作が複雑で、彼女には使えそうには思えなかった。そのため、この数年間、猪野家のアルバムの使用量は急激に減少していた。猪野夫人は不満であった。彼女は自分で使えるカメラを欲しいと願った。

昭和51年も初秋に入ったある日曜日の午後、猪野夫人は珍しく家にいた夫と連れ立って、夫の礼服を買うために玉川高島屋ショッピング・センターへ出かけた。駐車場に車を置いて、3階の渡り廊下を通りショッピング・センターの中に入ると、右手に「カメラの白井」という店があった。「ほう、ずいぶん値下げしているなあ。」という夫に従って、正面廊下側のショーウィンドーを見ると、ポケット・カメラ4割引の大特売の広告がはられていた。2人は、別に立ち止まることもなく、そのウィンドーの前を左折して、高島屋デパートの中へと歩を進めた。

「あんなに値下げしてもうかるのかしら。」「あそこの店は安売り屋のチェーンとして有名な。量が捌ければ、低価で仕入れることもできるんだろうが、それにしてもちょっと安すぎるなあ。この間、カメラ・メーカーに勤める友人に聞いた話だけど、社員でも定価の2割引でしか買えんそうだよ。」「それでは、あそこの店は損をして売っているの。」「量販店というところは、目玉の商品には原価以下の価格で客を吸引して、ついでに他のもうかる商品を買わせる商売をすることがあるんだ。メーカーが生産を中止したモデルの在庫をたたき売りして安くなることもあるな。」「きっとどこかに問題のある商品なのよね。衣料品のバーゲンセールなんかでも、滅多に良い品なんて見つからないわ。」目指す紳士服売場が近づいたので、2人のカメラ談議はそこで中断された。

その日の夕食の時に、再びカメラの話が持ち上がった。「ところで、今日安売りしていたカメラは何て言いましたっけ。ポケット・カメラでしたっけ。ポケット・カメラって一体どんなカメラなのかしら。」「ママ、ポケット・カメラを知らないの。」と長男の太郎が口をはさんで、CMソングを唱いだした。「ポケットにポケットが、ポケットにポケットが、♪♪ ……」「ああ、あれなの！」彼女はテレビ・コマーシャルの幾つかを思い出した。

「ポケット・カメラというのは、名前の通り、ポケットに入れられる程コンパクトなカメラなんだ。家にあるような一眼レフは大きいし重いだろう。あれでは持ち運びの機会も限られてくるよな。この前スキーに行ったのは何年前だっけ。あの時、カメラを胸にぶらさげて滑っていて、パパはつくづくカメラなんて持って来なければよかったと思ったよ。ポケットはそんな時にはピッタリのカメラといえるな。」

猪野氏は、続けて、カメラ・メーカーに勤める友人の村木氏から聞いた話を語った。「もう5年以上前になるかな、世界で一番大きなカメラやフィルムのメーカーのコダックが初めてポケット・カメラを売り出したんだそうだが、あんなにコンパクトなカメラを可能にしたのは、

結局、フィルムの技術革新によるんだそうだ。良いフィルムが発明されたので、小さなフィルムですむことになったというわけだ。ビジネスマンの一人として見ると、他人の会社のことながら、ぞくぞくするようなイノベーションだな、あれは。」猪野氏は、話に夢中になると、夫人や子供達には理解できない英語をまぜて話をする癖があった。

「日本ではカメラを保有している家が8割位あるんだそうだ。村木君の話では、去年1年間に、日本で売られたカメラが340万台位あったそうだが、その内の3分の1がポケットで、残りの半分が、家にもあるような一眼レフだったそうだ。ポケットが日本で売られてからまだ4年位だけど、すごい勢いで普及しているので、もうじきポケットの世帯普及率も10%を超えるんじゃないか、と彼は言っていたよ。」

話が専門的になってきたところで、亜理子夫人が口をはさんだ。「ポケットに入るといことは、女の人の場合だったら、ハンドバッグにも入れられるということよね。私なんかでも使えるカメラなのかしら。」「別に、女性を対象に作られたというわけではないだろうが、女性にもふさわしいカメラだろうね。先月のうちの課の旅行の時に、野村義子君が持ってきていたよ。ちょっと見せてもらったんだけどね、操作はすごく簡単なようだよ。」と猪野氏は答えた。

「僕のクラスの山崎君と小野君も持っているよ。僕も欲しいなあ。」と太郎が言った。「お前にはまだ早い。」「でも……」「でもじゃない。中学生のくせに。」と言って、猪野氏は太郎の注文を受けつけなかった。

この日のカメラの話はそれで終わったが、中学2年生になる長男の友達の中にはカメラを持っている者が多数おり、長男が前々からカメラを欲しがっていることは、猪野夫人にはよくわかっていた。そこで、過去に2～3回、彼女が頼んで父親の一眼レフを借りて使わせたことがあったが、父親はあまり好い顔をしなかった。古い方のカメラは、故障がちだったので、戸棚の奥にしまったまま誰もとり出す者がいなかった。長男が今後も欲しがらうのなら、高校の入学祝いにでもカメラを買い与えなくてはならないだろう、と猪野夫人は考えていた。

翌週のある日、猪野夫人は小学校6年生になる長女の花子を連れて通学服を買いにまた玉川高島屋を訪れた。「カメラの白井」の前を通ると、特売のポスターがはられていた。それには、「特別奉仕品ポケット・フジカ・ブラックタイプ500 ケース付 26,500 → 16,800円」と記されていた。先日夫と一緒に見た特売品と同じものようであった。

この日、猪野夫人は時間に余裕があったので、この店に立ち寄ってみることにした。店に入ると、思ったよりも多くの商品が陳列されているので、彼女は少々戸惑った。猪野夫人はポスターの特別奉仕品を見たいと思ったが、それがどこにあるのかわからなかった。「特別奉仕品」なのだから、店内にもどこかにポスターがはられているのではないかと見回したが、見つからない。キョロキョロしていると、若い店員が寄ってきた。「いらっしゃいませ。何かお

探しでいらっしゃいますか。」「ええ、ちょっと、ポケット・カメラを見たいと思って。」「ポケットでしたら、こちらにございます。」と店員は彼女を誘導した。

そこには種々のポケット・カメラが多数陳列されていた。「ポケットでも色々な会社のものがあるのね。」彼女は驚きの声で店員に尋ねた。「ええ、47年の秋にコダックが最初に出した後、しばらくはコダックだけだったのですが、49年の春にミノルタが、そして50年の春には、フジやキャノンといった国産メーカーが次々に出て、ご覧の通りです。」各々の商品の値札には、ブランド名、モデル名の下に黒と赤で2つの値段が記されていた。この店では軒並み値下げをしているようであった。ようやく、彼女は、それらの値札の中から特別奉仕品の名を発見した。「表にポスターが出ていた特売品はこれかしら。」「はい、さようでございます。フジカ500のブラックをケース付で16,800円でご奉仕させて頂いております。」猪野夫人は以前夫が語っていたことを思い出して質問した。「他のものは2割引位なのに、これは4割引位かしら。ずいぶんお安いのね。これはもうメーカーでは生産していないモデルなのかしら。」「いいえ、古いモデルですがそんなことはないと思います。これは、お客様のご愛顧にお応えして、当店が精一杯ご奉仕させて頂いているお買得品です。」

「安いのは、1万円以下のものから、高いのは5万円以上のものまでずいぶん色々なのね。高いのと安いのとではどこが違うのかしら。」「そうですね。一つはレンズです。安いものはプラスチックのレンズです。」「え!! プラスチックのレンズなんてあるんですか!」「はい。レンズもそうですし、このボディなんかプラスチック製です。それが、ポケットでも高級機種になりますと、レンズはガラスのレンズですし、露出合わせが自動的に行なわれるEEカメラになります。」「お宅では、どんなのがよく売れているのかしら。やっぱり、ポケットは女・子供向きなんですよ。」「ポケットのお客様は、必ずしも、女性の方やお子様に限られているわけではございませんが、私どもで今よく出ているのは、このフジカ350ズームなんかですね。最近はこのズームとかそのお隣りにあります350ワイドなど、レンズに一工夫した一味違う新製品に人気があるようです。」350ズームの値札には、ケース、フィルム付で21,550円→17,200円の値段が記されていた。

「女性向のカメラというと、他にどんなカメラがあるのですか。全く知識のない者でも間違いなくきれいな写真の撮れるカメラは……」「そうですね、ポケットは勿論一番コンパクトで軽いのでハンドバッグにも入りますし、フィルムはカートリッジになっていますから、簡単に間違いなく装填できます。操作はすべて簡単でどなたでも撮せます。ポケット以外でしたら、こちらのコニカC35EFはストロボが内蔵されて、どんな条件の下でも、どんな初心者の方でも間違いなく撮影ができます。ベスト・セラーの機種です。」「そう、カタログを頂戴できるかしら、家に帰って検討してみるわ。」「どうぞ、またお越し下さいませ。」彼女は幾種類かのカタ

ログを手に店を出た。

数日後、亜理子夫人は、買物のついでに、地元の商店街にある高橋カメラ店を訪れた。ウィンドーの中に陳列されている商品をながめながら店の中に入ると、中年の主人が、「いらっしゃいませ。」と言って寄ってきた。

「実は、操作の簡単なカメラを欲しいのですが、どんなものがあるのでしょうか。」「ご主人様もお使いになれるカメラですか。」「いえ、主人は、一眼レフというんですか、大きくて難しいのを一台持っているのですが、私には使えないので、私が見える……そうそう、中学生の息子と一緒に使えるような簡便なカメラが欲しいのですが……。」「そうですか、それでしたら、このコニカ C 35 EF をお勧めします。撮り易くて、コンパクトで軽いですし、一眼レフと同じように 35 ミリ・サイズのフィルムを使用しますから、きれいな写真ができます。最近、このクラスでは、7 割方のお客様はこのカメラをお求めです。よく売れていますよ。」

「最近、テレビのコマーシャルなどでよくポケット・カメラというのを見るのですが、あれは如何ですか。」「あれは、私としてはお勧めできません。一時はブームになって、うちでもよく売れましたが……。レンズがプラスチックで暗いものですから、どうしてもシャッター・スピードが遅くなりますね。すると手ぶれが起るんです。ご存知のように、ポケットのフィルムは原版が小さいですから、どうしても失敗の写真が多くなってしまいうんですね。」続けて、店主は次のように語った。「それに、フィルムの値段も、定価は 35 ミリのフィルムと同じですが、35 ミリのフィルムは競争が激しいので値引き合戦が行なわれていますが、ポケットのフィルムの方はそれ程値引されませんので割高になります。同じようなことがプリント代にも言えて、ポケットの場合ですと、サービス版で 1 枚 60 円と、他と比較して高いんです。」

猪野夫人は血の気がすうっと下る思いがした。彼女はポケット・カメラに強い関心を持ち始めたところであった。来月、女学校時代のクラス・メイト達と、信州旅行をすることになっていた。彼女としては、結婚して以来、家族と離れて旅行するのは初めてのことであった。その打合せ会の時に、誰がカメラを持っていくかという話が出たが、一人しか持参予定者がいなかった。猪野夫人はこの機会にカメラを買おうと本気になって考え始めていた。昨夜、夫に相談したら、夫も賛成してくれて、「ポケットなんていいじゃないか。」と語っていた。

猪野夫人はその店の主人に質問した。「女性がカメラを持つのは、旅行の時とか、ちょっとした行楽の時だから、携帯性が一番大事で、別に芸術作品が撮れなくてもよいと思うのですが……。」「そりゃ、形だけで選ばれるんでしたら、ポケットでも結構ですが。ただ、携帯性に富んでいるといっても、ポケットの場合、ストロボは別に持たなければなりません。その点、コニカ C 35 EF は、カメラにストロボが内蔵されていますから、結局トータルでは、こちらの方がコンパクトになりますし、重さも、340 g と非常に軽いです [ポケット・フジカ 350 ズームの

本体は200g)。ストロボの操作も実に簡単で、このストロボを、こうやってONのところへ上げれば、あとはシャッターを押すだけですみます。明るいところでは、OFFのままにしておけば、普通のカメラと同じです。どんなところでも間違いなく撮れるし、非常に携帯性にも優れているということです。」

「あなたのようなプロの方でも、ポケットだと、ぶれたりするのですか。値段の高いポケットを使っても同じでしょうか。」「明るい戸外でなら、他のカメラとほとんど変らぬ写真が撮れますが、ちょっと暗くなるとぶれ易いですし、解像力が弱いのでやはりぼけますね。高級なポケットはレンズは明るくなりますが、そういうものでは重くなりますので、それではポケットの意味がなくなります。」

「C35やポケット以外で適当なものがありますか。」「そうですね、オリンパス35はいずれのモデルもよろしいかと思えますし、ちょっと、お値段が高くなりますが、ヤシカ・エレクトロ35のシリーズもあります。まあ、同じお値段をお出しになるなら、ポケットよりも、こうしたカメラの方をお勧めします。」「どうも色々とありがとうございました。少し検討してみます。」

「またいらして下さい。1割5分位でしたら勉強させていただきますから。」

2～3日後、猪野夫人はPTAの用事で、同じPTAの副会長をしている坂本夫人を自宅に尋ねた。用件が終わったところで、坂本夫人が、2枚の写真をもって来てこう語った。「猪野さん、これこの間の運動会の時の写真。あなたの写っているのを2枚焼増しておいたわ。」「あら、坂本さん、あの時はカメラなんか持っていらしたの。私、ほとんどあなたの側にいたはずなのに、ちっとも気がつかなかったわ。」「そうお、ハンドバックの中に入れておいて、時々、パチパチやっていたのよ。」「じゃ、ポケット・カメラで。」「そう。」「わぁ、よく撮れているわ。」「まあまあだったわね。」「坂本さん、そのポケット・カメラ、ちょっと拝見させて下さらない。私、今、カメラを一台買おうと思っているところなの。主人も薦めるので、ポケット・カメラにしようかな、と思っていたのですが、この間、商店街のカメラ屋さんに行ったら、ポケットでない方がよいというので、迷っているところなの。」坂本夫人は奥からポケット・カメラを持ってきて彼女に手渡した。それは、コダックの品であったが、プラスチックのボディーではなくスチール製で、思ったよりも重かった。猪野夫人は、それと同じモデルは、彼女が行った2軒の店にはなかったように思った。ポケットとしては、とっても高級な機種に見えた。

「これは、数年前に、主人に頼んでアメリカで買ってきてもらったものなの。」と坂本夫人が語った。坂本夫人のご主人はある会社の社長で、しょっちゅう外国旅行をしていること、そして坂本夫人も年に1回位は同行している話は、猪野夫人も聞かされていた。坂本夫人は非常に見聞も広く、博学の人であり、考え方もモダンで、行動的であった。PTAでは、副会長のポストにあったが、実質的には会長以上の仕事をしてきた。人当たりもよく、めんどろ見がよいの

で、皆んなから慕われていた。5～6才年上ということもあって、猪野夫人は坂本夫人を尊敬していた。

「ポケット・カメラは手ぶれが多いし、ぼけた写真が多いと、カメラ屋さんは言うんですけど、どうですか。」「そうね、最初の内は、私も何枚か手ぶれを起して、顔半分の写真なんかも撮ったことあったけど、それもすぐコツを憶えるわ。それにポケットで撮った写真は引伸せないといわれるけど、私達は、エコノミー・サイズ以上の大きさに引き伸すことなんてどれだけあるかしら。そうしたい時には、もっと大きい良いカメラで撮せばよいのよね。家には、カメラは何台あったかしら。ニコンに、キャノンに、ポラロイドでしょう。それから……と、このコダックのポケットと全部で7台もあるかしら。それぞれ一長一短あるでしょう。だから、用途さえはっきりさせれば、それぞれの特徴をうまく生かした有効な使い方ができるんじゃないかしら。私は、家族と一緒にではなくお友達と旅行する時とか、さり気ないスナップ写真を撮る時には、このポケットを使うことにしているの。」

「ポケットでも、値段はピンからキリまであるようですが、どんなのがよいかしら。」「よくわからないけれど、私の知っている限りでは、どれも大差はないみたい。娘は国産の安いのもっているけど、出来栄はこれと変りないようよ。最近、ズームとか望遠切替えのものとか色々変わったのも出ているみたいね。私もまた一台欲しくなっちゃったわ。私って新しもの好きなのかしら。」

その週末、天気良かったので、猪野夫人は2人の子供を連れて、多摩川の河原を散歩した。その折に、若いジープ姿のアベックに出合ったところ、男の子の腰のポケットにポケット・カメラがのぞいて見えた。コマーシャルから抜け出てきたようなその光景が強く猪野夫人を印象づけた。

それから数週間、猪野夫人にはカメラを買う行動は見られなかったが、彼女は時々パンフレットをながめては、色々と考えているようであった。一度、猪野氏が、「カメラどうした。」と言うので、「迷っているの。」と答えると、彼は「自分で気に入ったものを買うとよい。」と言って、それ以上のアドバイスはしてくれなかった。

信州旅行に出かける一週間前に、同行予定の恵利子さんから電話がかかってきた。彼女の用件は、カメラを持参することにしていただけでも、故障してしまったので、猪野夫人に写真係になってくれないか、という依頼であった。猪野夫人は、あまり深く考えずに、「じゃ、私が持っていくわ。丁度、一台買おうと思っていたところだから。」と答えた。

その3日後、猪野夫人は、旅行の準備の買物のために、日本橋のデパートに出かけ、そのついでに、カメラ売場で、ポケット・フジカ・350ズームを購入した。ケースやフィルムなど一セットの「キット価格」は19,400円であった。



信州旅行は一泊2日ではあったが、昔の学園生活の思い出などに話がはずんで和気あいあいであった。好天にめぐまれて、紅葉の景色が非常に美しかった。特に小諸の懐古園から千曲川越しにながめた信州の山並みが印象的であった。猪野夫人は写真係としても大忙しであった。当初は20枚撮りのフィルム一本で済むかと予想していたが、結局、2本を買い増す程撮ってしまった。ポケット・カメラも珍しがられて、しばしみんなの関心の的となり、話題をさらった。

帰宅した翌日、猪野夫人は、さっそく撮ってきたフィルムを現像に出した。前にポケットの話聞きに行った高橋カメラ店には行きづらかったので、ちょっと遠回りのところにあるもう一軒のカメラ店に現像を依頼した。「エコノミー・サイズにお焼きしてよろしいですか。」という店員に、彼女は「はい、お願いします。」と言って、店を出た。

4日後、猪野夫人は現像されてきた写真をとりに行った。カメラ店の店員が袋の中の写真をとり出してチェックしようとする手を制して、彼女は、「そうそれです。お幾らかしら。ちょっと急いでいるの。」と言って、出来栄も見ずに足早に帰宅した。

居間のソファに座って、写真を袋からとり出して見たら、結構美しい写真が飛び出てきたので、彼女はほっとした。しかしながら、よく見ると、夕方撮ったものの中には、見るに耐えないものがあったし、日中撮ったきれいに写っているものでも、手ぶれのためか構図がずれて、人物がきちんと収まっていないものが発見された。結局、見るに耐えられる写真は3分の2位しかなかった。旅先の風景が非常に美しく、旅行のすべてが大変楽しいものだったので、猪野夫人の落胆も大きかった。

旅行から半月程経ったある日の昼過ぎ、旅行に出かけた7人のメンバーは渋谷の喫茶店で再会した。猪野夫人は、そこで6名の友達に焼増プリントを手渡した。「きれいに撮れているわね。」みんなが異口同音に返した評を聞いて、猪野夫人は胸をなで下した。写真を見ながら、旅行の思い出に話がはずんだ。誰も、「あの時の写真はないじゃない。」とは言わなかったもので、猪野夫人は失敗した写真のことは一言も口にしなかった。

〔設問〕

1. 猪野夫人のポケット・カメラの購入者としての行動を分析して、その行動過程がどんな段階を経て進行してきたかを整理しなさい。
2. 彼女の行動に影響を及ぼした要因を抽出し、それらを幾つかの有意義なグループにまとめてみなさい。

3. カメラの売手（メーカー，小売店）の立場から，彼女のような人に対して，どんなマーケティング政策を展開することが有効と思いますか。

5

10

15

20

25

不許複製

慶應義塾大学ビジネス・スクール

Contents Works Inc.